

【 5 】

氏 名	大 峯 顕 おお みね あきら
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 107 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 51 年 5 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	フィヒテの宗教哲学

論文調査委員 (主 査) 教 授 武 内 義 範 教 授 武 藤 一 雄 教 授 辻 村 公 一

論 文 内 容 の 要 旨

フィヒテは1794年の「全知識学の基礎」以後も、終生知識学の根底について問い直し、それに基づいて知識学の体系を新しく叙述しつづけた。本論文で大峯氏は、彼の後期知識学に対する思索の深まりを段階的に追考し、彼の思想体系の変遷を全過程にわたって詳述しようとする。それはこの変遷の過程を知悉することによってのみ、フィヒテの宗教哲学の問題点が、明らかにせられるからである。以下第一章から順を追うてその概要を述べる。

フィヒテは周知の如く、如何なる哲学を選ぶかは、その哲学者の性格によるとして、哲学が哲学者の生を離れないことを主張した。しかし他方では、彼はあくまでも学としての哲学、厳密な論理を有する体系としての哲学にのみ、哲学の意義を認め、生の智慧や人生観に基づく哲学をきびしく拒否した。この一見互に矛盾した態度は、大峯氏によれば、フィヒテの最初から最後まで一貫して変らぬものであって、単なる二重視点とか、途中で態度を変更したということではない。大峯氏はフィヒテをこのように解釈する従来の諸学説に正当な批判を加え、フィヒテに於ては学として哲学と生との両極は対立しつつ結合し、結合しつつつねに対立していたという。

フィヒテの知識学は、正確には1801年の「知識学の叙述」において、その新しい深まりを顕にしはじめる。しかし1798年の知識学の講義（「新しい方法による知識学」）に既にその萌しが見られる。大峯氏の「フィヒテにおける構想力の概念」（第二章）は力作であって、フィヒテの当時（イェナ時代）の思索の核心が生産的構想力の問題を中心にして見事に論じられている。フィヒテの構想力はその働きがカントのその如く単に理論的領域にとどまるものではなく、理論と実践とを統一する一層深く広い地平に於て作用する。さらにこの構想力は、又シェリングのその如く、絶対知の能力でもない。それはあくまでも有限性に終始する。そこからこの構想力の独自の性格付けがなされる。この講義に於て、自我の自己限定とか障害の問題の考え方など、知識学の基礎概念のいくつかが1794年の「基礎」の場合とは、微妙な差違を呈して来ている。これも、大峯氏によれば構想力の新しい把え直しに直接間接に関連しているのである。

「対決期のフィヒテとシェリング」(第三章)は、1800年から1802年の両哲学者の往復書簡を中心にして、氏はそれと関係している両哲学者の諸著作を委しく参照して、この対決の思想的経緯を詳述している。叙述は両雄の思想的対決を生き生きと展開している。この対決はその結果から見れば、みのりのない不幸な不一致を顕在化させただけのことに終わったが、そこに扱われた問題そのものは、彼等の意識とは独立に、重要な意味をもっている、と大峯氏はいう。

1801年の「知識学の叙述」(第四章)でフィヒテは、はじめて絶対知の概念を提出する。しかし彼は同時に絶対者と絶対知との区別を力説する。そこにフィヒテと、両者を同一視するシェリングやヘーゲルとの立場の差がある。さきの哲学(知)と生との対立的統一は、生を絶対者の生にたかめることによって、その勢位を強めた仕方であって、正しく宗教哲学に変貌しつつある知識学を成立せしめる。

1804年の知識学(第五章)を、大峯氏は知識学のほぼ最終形態として、その内容を詳述している。知はここでは自己自身を否定して絶対者の内に根拠付けられ、その様なものとして絶対者の内で自己自身を見出す。そこで知の自覚は絶対者の現象として、絶対者の側から見直されることとなる。1801年の「知識学の叙述」に示された絶対知を超えた端的な絶対者という考えや光の意味深い隠喩は、知を絶対者の現象として把えるこの立場に於いて、光の形而上学から再組織される。

「ドイツ観念論における神秘主義と形而上学」(第六章)で、論者はこれまで迎えて来たフィヒテ思想の変遷の考察に対して、結論的な見解を述べる。ドイツ観念論を規定する二つの根本的傾向としての観想的形而上学と神秘主義の中で、フィヒテの体系はカントの超越論的見地をどこまでも深めて行って、自己活動としての自我の根底に、かくれた神を見出すという形をとっている。超越主義と神秘主義のこの独自の結合に於ける思惟は、今日猶孤独であってその真の射程がさらに測定さるべきである、と。

論文審査の結果の要旨

フィヒテの後期「知識学」の変遷は、シェリングやヘーゲルが彼を超克して了ったと誤って解されたために、従来は一般に注意せられなかった。たまたまこの思想の重要性を意識したひとびとも、その極度の難解さのために容易に手をつけることが出来なかった。しかし現代のドイツに於るフィヒテ研究は主としてこの問題に集中して来ている。論者は多年にわたってフィヒテの諸著作の研究に精進し、新旧のフィヒテ研究にもあまねく目を配って、ついにこの劃期的な業績をなしとげた。大峯氏のこの論考によって、我国のフィヒテ研究は、かつてない水準の高さに押し上げられたと言ってもよい。本論文はドイツに於けるフィヒテ研究と比しても、いささかの遜色がないばかりでなく、その分析の鋭利、解釈的的確という点では、独自の長所を有している。少なくともわが国のドイツ観念論の研究は、今後この書を看過してすませることは出来ぬであろう。

本論文の特色は綿密なフィヒテの諸著作の渉猟と、それに基づく鮮かな分析によって、フィヒテの思想の変遷の委曲を尽して論述している点にある。そうしてその経過そのものに、フィヒテの宗教哲学の根本の問題を見出したことである。本論文は又ただにフィヒテ研究書としてのみならず、それ自身一箇の哲学的労作として、その内容の充実とその叙述の精密という点に於て、近来稀なる著作と見なし得る。

しかし猶二三望蜀の言を吐くとすれば、(1)大峯氏が知識学の問題に中心を置いて、フィヒテの宗教哲学

関係の諸講演をそれ程留意しなかったのは、たしかに一箇の見識である。しかし宗教哲学を問題とする限り、これらの著書のうちにも、それぞれに重要な意義がある筈である。もし生と哲学の対極の間で独自の旋回をなしたのが、フィヒテの哲学であるとすれば、哲学自身の内部でも、同様のことが言いうるのではないか、したがってヘーゲルの如くそれらの講演を単に populär と貶することは不当な評価であると思われる。(2)フィヒテ後期のうち1804年以後の変遷をさらに追求すべきである。大峯氏は後期知識学の完成を1804年の講義にみとめ、(勿論その後のものも、本論文中にしばしば参照せられているが)そこで一応ピリオッドを打とうとする。これも現代の後期フィヒテの研究書にもとられている視点で、それはそれとして充分に理由のあることであろう。しかしフィヒテの「像」の理論の充分な研究のためには、さらに1810, 1812, 1813年の知識学講義にまで論述を及ぼすことが望ましい。(3)大峯氏はフィヒテとシェリングの対決を、概ねフィヒテの側から考えている。これはシェリングに組みする学者が多すぎるので、勢いそうならざるをえなかったのであろうが、つぎにはシェリングの側に身を置いて見直す必要があるのではないか。そうでなければ、そこで扱われた問題の彼等(フィヒテ、シェリング)を超えた重要性は充分に、取り扱われえないのではないだろうか。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。